北落師門

小島政二郎

北落師門

小島政二郎

北落師門　©一九七一　検印廃止
定価七八〇円
昭和四十六年十二月　五　日初版印刷
昭和四十六年十二月十五日初版発行
著　者　小島政二郎
発行者　山越　豊
印刷所　三陽社
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（三六）五九二一（代）
振替　東京三四番

北落師門　目次

食う寝るところ　7
目一つ開く　10
新商売　18
自分というもの　29
他志（たし）　37
水商売　42
人の声々　50
老いないもの　64
半処女　73
女房　87

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじまり　104
発芽力　119
新らしい旅　129
三十六歩　145
轆轤（ろくろ）　159
馬鹿利口　174
生活力　197
異相　215
大地震　234
ヴァイタル　246
うなりごま　256

天才論　276
初夜　291
コヨーテ　300
新らしい明日　314
足一つ上りの宮　328

装幀　高松次郎

北落師門

食う寝るところ

角兵衛獅子――と言っても、今の若い人は御存じあるまい。

獅子頭をつけた頭巾をかぶり、縞の「たッつけ」をはいて、締め太鼓の音に合わせて大道で足駄をはいたまま逆立ちをしたり、逆立ちのまま手で歩いたり、前後左右にトンボを切ったり、陸橋のようにお腹を上に逆さになって足と手を同時に地面について見せたり、まあ、そんな単純な芸をして投げ銭をもらう大道芸人だ。太鼓を叩くのが大人で、芸をするのは大抵十前後の子供が二人――いつもそんなコンビだった。

私達子供があんまり親の言うことを聞かなかったりすると

「角兵衛獅子にやってしまうよ」

と言って、おどされたものだ。

「御飯を食べさせてもらえずに、酢ばかり飲まされるんだとさ。そうすると、ああいう風に骨が柔かくなるんだって――」

そう言って、修行のつらさを聞かされもした。しじゅうお腹をすかしてひもじい思いをしている可哀想な子供芸人として大人達の話題になっていた。

その日は、よく晴れた、木枯らしの吹く十一月半ばの午少し前、東京の下町に角兵衛獅子の太鼓の音が聞えていた。

太郎と次郎の二人が、今盛んに獅子の洞入り洞返し、トンボを切ったり、切り返したりしている最中、着飾った七五三の女の子が、母親に手を引かれて通りすがりにフッと来て前に立った。

次郎は男の姿こそしているが、「たッつけ」を脱がせれば、いたいけない女の子、年はまだ数えの五つだ。奇麗な物を見れば、目がそっちへ行く。その透きに、思わず一つ間をはずした。

ピシーリ

革の鞭が、地面に突いている次郎の手に飛んだ。痛さに手が崩れて、いやというほど彼女は顔を地面でこすった。

「御免なさい」

次郎は怯えて悲鳴をあげた。その顔へ、もう一ト鞭――

「何をするんだね」

鞭が顔へ届く寸前、若い女の声と一緒に、天秤棒がそれを払いのけていた。朝湯帰りの、銀杏返しのよく似合う細面の娘さんが、眉に険を含んでそこに立っていた。

「……」
美しい女の出現に、太鼓打ちの繁太も鼻白んだが、赤の他人に仕事の邪魔をされた腹立たしさは目顔に隠せなかった。
「どうせこのままにして置いたら、私のいないところでまた折檻されて、午のおまんまを食べさせてもらえないのが落ちだろう」
ションボリうなだれている太郎と次郎に向ってそう言うと、銀杏返しの娘さんは
「さあ、おいで。お腹一杯、何か好きなものを御馳走するから——」
本当に銀杏返しの娘さんが二人を連れて行こうとするのを見て、繁太は慌てた。
「冗談じゃない。それを連れて行かれちゃ、こちと等は飯の食い上げだ。冗談も、いい加減にしてくれ」
遮るようにヌーッと彼女の前へ来て立った彼は、既に喧嘩腰だった。
「野暮をお言いでないよ。この二人を連れて行くからには、今日の日当はタンマリはずまあね」
繁太なんか人臭しとも思っていない娘は、帯の間から蟇口を出すと、大きな五十銭銀貨を二枚、チャリンと音を立てて捨てるように地面に落した。
「さあ、行こう。何をぐずぐずしているのさ」
繁太を憚ってウジウジしている二人を忙き立てて、彼女はサッサと歩き出した。湯上りの素足が白い。
「一体、どこへ連れて行くんだ？」
銀貨を拾いながら繁太が聞いた。
「私の家さ」
おはつは、涼しい顔をしていた。
「家ッてどこだ？」
「誰にでも聞いてごらん。皆さん御存じだよ」
そう言ったッきり、あとは何を聞かれても、知らん顔——
事実、この町内でおはつを知らないものはいなかった。いい女で、お俠で、弱い者いじめをする奴、無理難題を通そうとする奴、不条理を言い募る奴、そんな手合を見ると、相手が男であろうと、女であろうと、見過ごしに出来ない生まれ付だった。
それも無理はない。父はこのあたり五ケ町を一手に預かっている頭で長吉、「兄貴ゃ二階で木遣りの稽古」と唄にもあるように、若い頃は東京十五区切っての木遣りの名手だった。
家へ連れて帰ったおはつは、小さくなっている二人に
「遠慮はいらないんだよ、この家では——」
そう言って
「何がいい？　ふだんから食べたいと思っていたものを言

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ってごらん」
笑顔で聞かれても、オイソレとは答えない二人に、とうとうしまいに
「おいらウナギドンブリ――」
「私はお寿司――」
と言わせた。
おはつの明るい性格は、人怖じしている二人を懐かせるのに手間暇はいらなかった。しまいには、聞かれるままに、木賃宿の明け暮れから、ひどい粗食、殴る蹴るの稽古のことなど角兵衛獅子の内幕を聞くうちに、おはつは身につまされて涙ぐまずにいられず、二人を繁太の手に返す気なんかなくなってしまった。
「誰が返すものか」
お父さんに頼んで、この子達を引き取ってもらうことに彼女は心を極めた。
一緒に物を食べると、人間、不思議に遠慮がなくなるものだ。人を信じず、妙にかじかんでいた二人とも、笑顔を見せておはつにいろんな打ち明け話をするようになった。
話のブッキラボウな太郎の口から、繁太の上に親分のいることを彼女は知った。世の中に貧ほど悲しいことはない。暮らしの金に詰まって、僅かな金で自分の子を売る親のあることも彼女は知った。太郎は西も東も知らない頃に、人さらいにさらわれた子供だった。
そんなことを知ると、いよいよおはつはこの二人を手放す気がなくなった。
冬は日の暮れるのが早い。あたりが薄暗くなった頃
「御免よ」
そう言って、繁太が二人を受け取りに来た。
「何だ、手前は――」
予ねて言い含められていた三下が、初天辺から剣の峰を食らわせて
「何を？　おお、あの二匹の角兵衛か。あれはもらって家で飼うことにした」
乱暴も甚だしい。相手が凄んでも、下手に出て哀れに持ち掛けて来ても
「馬鹿いうな。聞けば聞き腹、可哀想で手前の手には返してやれない。二人にとっては、これが出世の始まりだ。喜んで置いて行け」
繁太にとっては、こんな無茶なセリフはない。必死になって掛け合いに及んだが、こっちにすれば、初めから無茶を承知で横に車を押しているのだから、喧嘩にならなかった。
「帰れ、帰れ」
の一点張りだ。
「帰れなら帰るが、帰るようにしてくれ」
と言えば

「よし。帰るようにしてやるから待っていろ」
そういう口の下から、バラバラと、威勢のいいのが五六人、手に手に桶へ水を一杯に汲んだのを持って立ち現れたかと思うと、物も言わずにザブリと一つ、繁太の裾へぶッかけた。
「……」
口惜し涙を呑んで、ほうほうの体で繁太は帰ったが、中一日おいて、親分という四十二三のふてぶてしい面構えの男が、初めは慇懃に、内に毒を含んだ物腰で掛け合いに来た。
奥へ通して、頭が逢った。長吉は、人の子をさらって来た相手の弱身を突くことを忘れなかった。そのことが公けになれば、前科が暴露することは目に見えていた。悪党だけに分りが早く、結局、金で埒があいた。
「よかったね」
おはつは二人を前において、喜んだ。
「こんな道楽は一度コッキリだぜ。二度は御免だぞ」
長吉は、そんな小言を言いながらも、御機嫌だった。

目一つ開く

四五日、二人に寝たいだけ寝かせ、食べたいものをタッブリ食べさせた上で、さて
「太郎ちゃん、これからどうする？」
おはつはそう言って、身の振り方の相談を持ち出した。
「太郎と呼んではいやだというのに——」
甘ッたれることを初めて知った彼は、角兵衛獅子時代の名を呼ばれることをひどく嫌った。
「あら、そうだったわね。でも、呼びいい、いい名じゃないか、本名よりも——」
彼の本名は、真偽のほどは分らないが、拙太郎と言った。次郎は可愛らしい名で、おたま——
「おたまちゃんの方は、当分私の傍においていろいろ仕込むつもりだけれど、お前さんの方は、まさか火消しにもさせられないしね」
彼女の父の弟が、隣町で三橋湯という銭湯を開いていたので

「そこの三助にでもなるか」
「いやです、三助なんか」
「一生三助なんかにさせておく気はないけどさ、とりあえずの話だよ」
「とりあえずでもいやです」
「へエー、お前さん、何か大きな望みでもあるのかい？」
「ううん、小さな望みです」
「それを言ってごらん」
「読み書きが習いとうございます」
「ああ、無理ないわね」
「でも、十にもなって尋常一年生はつらいから、私塾へ通わせて下さい。昼間はお宅で三下さんの下を働きます」
「おッ母さん、いいかしら？」
「どうせお前が仏を作ったんだから、ついでに魂を入れておやりな」
その頃は、まだ初等教育が今のように画一的に統制されていなかったから、久保田万太郎の「大寺学校」という戯曲にあるような私立の学校が方々にあった。
そういう学校は、学校というよりも私塾といった方が当っていた。早い話が、一年生とか二年生とかいうように教室が別々にある訳ではなく、一年生も、四年生も、皆一つ教室に入れられて、一人の先生に一年生も四年生も一緒に教わるのだ。個人教授見たいなものだ。

だから、太郎――いや、拙太郎のように十の一年生がいても、別に目立ちはしなかった。彼は早速、二三丁離れたところにあった愛日学校というのへ入れてもらった。
異常な興味をもって通い出した。彼は三月で一年生の学課を上げてしまった。当時は尋常科が四年、高等科が四年ということになっていたが、彼は一年で尋常科の四年を卒業してしまった。
そんな不完全な私塾だから、国語、習字、算術は教えてくれたが、理科は教えてもらえなかった。その代り、ソロバンが出来た。
拙太郎は、文字を知るに及んで、文字の持つ不思議な魅力に心を引かれ始めた。
今は「あいうえお」だが、その頃は「いろは」だった。「いろはにほへと、ちりぬるをわか、よたれそつね、ならむうゐの、おくやまけ、ふこえてあさき、ゆめみし、ゑひもせす」この四十七文字が、あらゆる日本語の根柢になっているということの神秘さに、彼は打たれた。
後に、大人になってから、イギリスのキップリングという小説家の「エー、ビー、シー、文字の始まり」というお伽噺を読んで、「いろは」を覚え始めた頃の自分の夢のような驚きを思い出した。
実際、誰が「いろは」という文字を発明したのだろうと、茫然として遠い遠い日本の太古を見詰めた。弘法大師だと

聞いて、偉い坊さんがいたものだと尊敬した。実に「いろは」は、日本語のあらゆる音を網羅しているばかりでなく、次のような今様歌にもなっているのだと聞いて、もう一度感心した。

色は匂へど散りぬるを、わが世たれぞ常ならむ、有為の奥山今日越えて、浅き夢見し酔ひもせず

この歌の無常観は、これまでの彼の十年苦を如実に語っていた。何千年の昔に、自分と同じ苦を舐めた人がいたのかと思うと、慰められた。彼の孤独感が救われた。新らしい生きる力が、五体のうちにフツフツと沸いて来た。

「姉さん——」

彼はそういう新鮮な心の経験を、興奮の語気で一つ一つおはつに話さずにいられなかった。彼は心の感動を話して、同感してくれる人が欲しかった。それがその人への感謝のあらわれでもあった。

「むずかしいことは私には分らないけれど、字を知るッてことは、そんなにもいいことかね」

高等科の二年まで行った彼女よりも、拙太郎の方が上のような気がするくらいだった。彼も、おたまも、彼女を二なきものに思い、全心で感謝していてくれることはおはつもよく分った。

漢字を知った拙太郎の驚きは、もっと大きく、何と言いあらわしていいか自分にも分らないくらいの喜びだった。

おはつの家では「都新聞」を取っていたが、その頃の新聞は「大新聞」と、そうでない新聞と二ヶ種類あった。大新聞には、一切漢字に振仮名がついていず、小新聞には漢字という漢字に全部振仮名がついていた。この振仮名のおかげで、私なんか随分沢山の漢字を知った。拙太郎も「都新聞」を読んで、ドンドン漢字の知識を拡げて行った。

「姉さん、お願いがあるんですが——」

「分っているよ」

「え?」

拙太郎が目を丸くしていると

「もっと学問がしたいッていうんだろう」

「……」

おはつの勘のよさに、拙太郎は自分の返事も忘れて、眉の涼しい彼女の顔を見守った。

「おたまは三味線が習いたいと言うし、二人とも欲が深くって頼もしいね」

そう言って、彼女は華かな笑顔になった。

新聞が読め、頭やおかみさんの枕許で講談本を読んで聞かせることが出来、時々頭の手紙の代筆をすることが出来るだけで、拙太郎は日本語の勉強はこれで十分だとその時は思った。

この上の欲は、自分ではどうにもならない漢文を少しでも読めるようになりたかった。幸い、愛日学校の校長先生

の奥さん――その頃下町には奥さんという言葉はなく、「御新造さん」と呼んでいた。これが町内切ってのいい女で、美人といえば、先ず第一にこの梅子夫人に誰でも指を折った。

色白の、餅肌で、愛想がよくって、何か言ったりしたりすることに、何ともいえないこぼれるような色気があって、声などの若々しさ。

嘘か本当か知らないが、昔、吉原の大籬で全盛を誇っていたおいらんだったのを、校長先生がせっせと通い詰めた揚句、身請けをした。そのために、家産を蕩尽してしまって、今ではしがない私塾を開いているのだと誰言うとない町内の噂だった。

それにしては話しが合わないのは、このおいらん上りだという梅子夫人が、四書五経の学があって、むずかしい漢文を「孔子曰く、予、言うことなからんと欲す。子貢曰く、子もし言わずんば、則ち小子何をか述べん。子曰く、天、何をか言わんや。四時行われ、百物生ず。天何をか言わんや」と、銀の字突きで一字一字をさしながらスラスラと読み下す事実だ。

拙太郎はおはつの賛成を得て、この梅子夫人のところへ通って

「子曰く、貧にして怨むなきは難し。富みて驕ることなきは易し」「人遠き思んぱかりなければ、必ず近き憂いあり」などと「論語」の素読から始めた。

漢文は、日本文と違って字数が多く、これでよしという際限がないだけに、彼は好奇心を刺戟されて、ズルズル、ズルズルと深みへ誘い込まれて行った。一年で尋常科四年を卒業したというような工合には行かなかった。

しかし、この時手解きを受けた素読のおかげで、後に旅行した時など、例えば宮本武蔵の碑の前に立った時など、苦労せずにスラスラと読むことが出来た。漢詩も、「山中人饒舌」のような画論を読む時にも、大いに役立った。

一方、おたまの長唄も、メキメキ上達して行った。

拙太郎が梅子夫人についたことは、未来のために一つの大きな仕合せだった。

と言うのは、夫人が、校長先生と違って一つの見識を持っていたからだ。それが立派な一家の見識であるということは、拙太郎にはまだ分らなかった。一つの、特殊な女の好みだとしか思えなかった。

夫人は活字本の「論語」ではなく、和紙に刷った木版の大形の本を持っていた。拙太郎が大人になってから分ったことだが、それは支那渡来の書籍だった。

何ともいえず美しく、本として一つの体裁と威厳とを持っていた。本にも字にも品位があった。彼の見馴れている活字本の文字とはどこか違っていた。「論語」に限らず、「大学」にしても、「孟子」にしても、彼女が持ち出して来る

本はみんな漢籍で、日本出来の本は一冊もなかった。そのおかげで、そこに印刷されている文字の美しさと品のよさとから、正しい文字の姿というものを彼は知らず知らずのうちに学んだ。

校長先生は、ナントカ愛石という人の書をお手本にして生徒に教えていた。拙太郎は夫人からは習字は教えてもらわなかったが、時々夫人が自分で字を書いているところに行き合わせたことは度々あった。

そんな時、夫人がお手本にしている法帖を見ると、愛石などとは似ても似つかぬ見事な書だった。拙太郎などにはよく分らなかったが、それでも力強さが彼を打って来た。

「私は女のくせに仮名文字が嫌いでね」

そう言って、彼女は線の強い漢字ばかりを書いていた。見ているだけで楽しかった。

「勉強ばかりしていても仕方がないね。男は働いて、行く行く自分で御飯を食べて行かなければならないんだから——」

或る日、そう言っておはつに何になりたいかと聞かれた。その頃手に職を覚えるには奉公に行くより外に仕方がなかった。

「……」

拙太郎には何になりたいという目当てがまだなかった。

「お父さんとも相談したんだけどね、家で世話して上げられる先は、大工か、紺屋か、木具屋か、せいぜいそんなものしかないけど、ねえ、このうちに何かないかい」

「ないなあ」

「ないじゃ、困るんだよ。何かないかね、この外でもいいから、これになりたいとか、あれになりたいとかいうもの——」

「それよりも、これになれと言ってくれないかなあ」

「そう言ったら、いやだと言わないかい？」

「ああ」

「きっとだね」

もう一度念を押されると、拙太郎は力なく笑い出した。

「ホレ、御覧な。駄目じゃないか」

「女は得だな。おたまちゃんは、いつまでも姉さんの傍にいられて——」

彼は働くのがイヤなのではない。毎日、三下の下を働いて調法がられているくらいだから、働くことは少しも苦に思っていなかった。

奉公に出ることも、その頃の人は誰も当り前のことと思っていた。従って、彼も苦にはしていなかった。ただ、おはつのところを離れるのがイヤだったのだ。

こんな優しい人に出会ったのは生まれて初めてだったから、別れたくなかったのだ。いつまでも甘えていたかったのだ。こんなに甘えさせてくれる人は、またあるとは思え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com